２０２５年度　総合型選抜Ⅲ期（文章読解型）　出題の意図・解答例

１　出題の意図

課題文は、「読書」という行為の有用性について、学校という「制度」と対置した点に特徴がある。そしてまた「想像力」と「効率」とを対比しつつ、現代社会への再考をうながすものである。問１では、前者に関して、課題文の内容を適切に理解しているか（読解力）を評価する。問２では、後者を起点として、解答者自身の目指す「大学生活」を論述させることで、解答者自身の考えがどれだけ明確で論理的に記述できるか（発想力／構成力／説得力／表現力）を問う。これらにより、大学における学修のための基礎的な技能・能力を判定する。

２　解答例

問一

筆者は自身の経験として、読書という行為を通じていくつかの視点から自分の立ち位置を眺めることができるようになり、その結果、世界がより立体性と柔軟性を帯びてきたと述べている。また筆者は、読書によって多角的な視点を獲得し、自分という存在を何か別の体系に託すことが、この世界を生きていく上で、とても大事な意味を持つ姿勢であることを強調する。筆者にとっての読書という行為は、ひとつの大きな学校のようであり、現実の学校制度の中に含まれていながら、それとは異なる自分自身の「制度」をうまく確保するための手段であった。すなわち読書という行為は、規則や評価や順位に束縛された「制度の壁」の克服に向かう方途なのであった。

問二

（解答例①「想像力」の重視）

筆者は学校という「制度」が自分には合わず、退屈で好きになれなかったという。そして授業はろくに聞かず、空想に耽っていたと告白している。そのような個人的背景をもとに、筆者は「想像力」の重要性を提起し、それを「効率」と対置させる。

「効率」は近代以降の科学技術、産業経済の基幹をなす考え方であり、私たちの生活も「効率」を重視する発想に立脚している。しかし筆者が述べるように「効率」を偏重する考え方は、二一世紀になって限界を迎えつつあるように思われる。筆者が挙げた福島原発の安全神話の崩壊はその最たる例であるが、より身近にはコロナ禍以降に顕著となった、宅配便等の配達員の過剰労働と賃金の問題などもその一例だろう。

大学進学率が上昇した現在、大学での学修もまた、卒業後の進路に向けての「効率」が意識されることがある。実用性があるとされる工学や商学分野に進学したり、資格取得のために大学進学を目指す友人もいる。しかし私は、そのような短絡的な価値ではなく、より自由で普遍に向かう思考と発想を獲得したいと考える。そのためには現実の外側に向かう「想像力」が重要であり、それは文学部の学修により身につけられると確信している。

（解答例②「効率」の重視）

筆者は「どんな時代にあっても、どんな世の中にあっても、想像力というものは大事な意味を持ちます」という主張を掲げ、その対極にあるものとして「効率」の追究を批判的に取り上げる。福島原発の事故を例に挙げつつ「効率」は「短絡した危険な価値観」であるとするのである。しかし人類の歴史とは「効率」を追究し続けてきた試行錯誤の蓄積であり、それ自体は決して短絡的ではない。

例えば情報伝達の場合、手紙から電話、メールへと長期的かつ不可逆的に効率化が進行したし、そもそも道具の製作と使用を開始した古代から、効率化への指向は始まっていたのである。私たちは効率化を推進する歴史の最先端に立っているが、それに対して実態のない「想像力」に訴えて「効率」を批判することは、人類の積み重ねてきた知的営為に対していささか粗暴な議論に思われる。

大学もまた、社会の一部にあって知的営為を担っており、大学自体が組織的に運営されている。そこでは各学科において一年次から段階的なプログラムが用意されており、各学問分野の学修が効率的に深められるように設計されている。その全体像を把握した上で、効率よく学修を進め、卒業の日を迎えられるようにしたい。